明治三八年の丁髷（我はいかにして途上国学徒となりしか 第一話）

著者	塩田 光喜
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	208
ページ	40-41
発行年	2013-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003799

我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田　光喜

明治維新による身分制度の廃止と藩制度の解体は徳川幕藩体制によって、土地と職業にしっかりと縛り付けられていた日本人の間に巨大な流動性を生み出した。

二十数代にわたって、讃岐詫間の荘で刀鍛冶を営々と続けてきた我が一族も、近代日本の流動の波に乗って変転を続け、私（昭和三一年生）はついに、ニューギニア高地にまで達してしまった。

本シリーズの目的は、近世民衆の一族が瀬戸内海に面した四国の故地からニューギニア高地に達する歴史を振り返ることにより、日本の近代が近世民衆にとって何であり、何をもたらしたのかを督見することにある。幸い、私は四世代同居の家で幼時を過ごし、更に、無類のストーリーテラーであった父方祖母キクに一族の歴史をふんだんに聞かされて育った。

三年前、私は友人の一人にライフ・ヒストリーを尋ねられて答えるうちに、ふと、これは明治維新まで遡れるぞと心付いた。そして、シュテファン・ツヴァイクの『昨日の世界』を読み返して、我が一族の歴史も、近代日本史にヴィヴィッドに光と色彩を与えられるのではないかと思った。「体感の近代日本史」とでも申せばよいだろうか。更に視野を広げるなら、我が一族の転変の歴史は形を変えて、今も途上国で日々繰り返されているに違いないと信ずる。

そして、このシリーズは同時に、戦後日本の「途上国学」（と、あえて申し上げておく）は、近代日本史において何であったのか、日本文化史においていかなる意味を有していたのかを問う試みともなるはずである。むろん、戦後途上国学全体を俯観するといった大げさなものではなく、私のライフ・ヒストリーに照らして、ごく体感的に語ろうというものである。幸い、私も齢五六を閲した。ベートーヴェンもドビュッシーもこの年で世を去っている。私も、この二人のような偉大な人物ではないが、語り部となる資格は十分に得たのではないか。

本シリーズは、先にも申し上げたように、歴史を鳥観するのではなく、徹底的に虫観しようというものである。私の世代（一九五〇年代生まれ）もそろそろ歴史の証言をする頃合いである。

面白い読み物とする所存である。気長にお付き合いいただければ、幸甚の至りである。

◉第一話

明治三八年の丁髷（ちょんまげ）

「讃岐詫間の塩田家は橘氏の裔であると申し伝えられる。」

私が高校に入学した日、祖母キクは私を畳に正座させると、こう語った。

「崇徳上皇、保元の乱に敗れ、讃岐の白峰の山に流されたまいし折、我れらが〝祖〟、上皇に供奉し奉り、讃岐に下りしという。

上皇、薨ぜられるや、供の者八八名のなか、四四名は宇多の郡に、四四名は多度の郡に散りしとぞ、伝えられる。」

我が家の始祖伝説である。四国巡礼が八八カ寺から成るように、八八は聖数である。明らかに物語は神話化されて、塩田家の嫡男へと伝えられてきた。

祖父定助は戦前に三七歳で亡くなり、長男の父は九州帝大で素粒子物理を学んだ理科系人間であったから、そうした神話伝承の類には頓着しなかった。そこで、祖母キクの出番となったわけである。

いつの頃に、橘姓を捨て、塩田姓を名乗り始めたのかは詳らかではないが、江戸時代には、詫間の地で刀鍛冶を家業としていたようである。讃岐から瀬戸内海を渡った対岸に、備前長船という刀鍛冶の集団が室町時代から続いたように、中世日本の各地には刀鍛冶を業とする職人の家系がいたる所にあったに違いない。我が家もそのひとつであったのだろう。我が祖達が鍛えた刀が何人かの血を吸ったと考えると、少し恐ろしくなることがある。

江戸時代を通じて、塩田家は刀鍛冶であった。

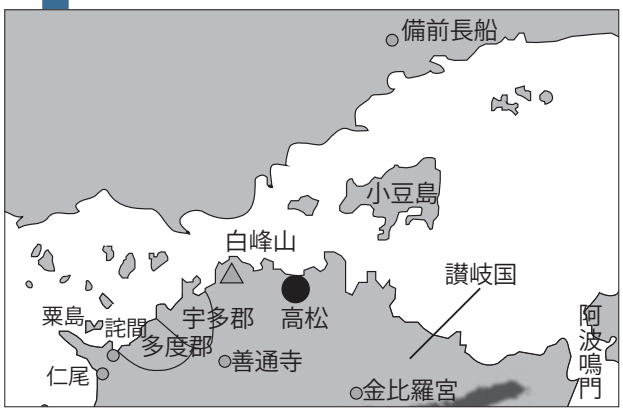
明けて、明治九年（一八七六年）に廃刀令が公布される。さあ、大変である。我が家は廃業の憂き目に遭ってしまった。当時、二〇になろうかという高祖父は激怒した。「代々伝えてきた刀鍛冶の家が、今さら、鋤鍬を打てようか」というわけだ。

我が家は職人の家系だけあって、一刻者の血が流れている。

刀鍛冶を廃業して、詫間や粟島や荘内半島の農民から換金作物を買って大阪へ売るという商売に転じた後も、高祖父は丁髷（ちょんまげ）を落とさなかったという。

彼が我を折って丁髷を落としたのは、廃刀令から二九年後、日本が日露戦争に勝った年のことである。彼はようやく、明治政府と近代日本を認めたのである。維新後三八年がたっていた。その年、東京では夏目漱石が『吾輩は猫である』を書き始めている。明治日本の地方には、こうした男も存在していたのである。

この一事を以ても知られるように、日露戦争は近代日本にとって一大転機であった。我が高祖父のような一刻者ですら、明治政府と近代日本の正統性を認めずにはおかぬように心変わりさせたほどの衝撃を持っていたのである。

我が祖父定助は当時、三才であった。

（しおた　みつき／アジア経済研究所　貧困削減・社会開発研究グループ）